

JSAA-ICJLE 2009

言語変化研究における『見かけ上の変化』の功罪
— 国立国語研究所の経年調査を中心に —



実時間的アプローチによる 敬語変化

朝日祥之*・松田謙次郎**・横山詔一*

*国立国語研究所 **神戸松蔭女子学院大学

2009.7.14

はじめに


- ▶ 本発表が扱うもの
＝敬語・敬語意識の変化
- ▶ 主張したいこと
＝「見かけ上の変化」と「実時間変化」を
統合する視点の必要性
- ▶ その事例として...
＝国立国語研究所による愛知県岡崎市に
おける敬語調査（以下，岡崎調査と称する）

本発表の流れ

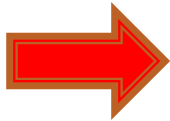
1. 敬語研究の動向と敬語変化
2. 岡崎調査の概要
3. 「見かけ上の変化」「実時間変化」
4. 加齢による敬語意識の変化
5. まとめと今後の課題

1. 敬語研究の動向と敬語変化

- ▶ 敬語:「人気のある」研究テーマの一つ

扱うレベル	扱う側面	具体例
ミクロ  マクロ	(a) 文法的な側面	丁寧語
		尊敬語
		謙讓語
		丁重語
		美化語
		方言敬語
	(b) 社会心理的な側面	敬語観
		敬語使用意識
		敬語に対する規範意識
	(c) 社会言語学的な側面	待遇表現 (プラス・マイナス待遇)
		ポライトネス
	(d) 言語社会的な側面	敬語論
		敬語政策
		敬語教育

広
範
囲
!



日本語学
国語学
社会言語学
言語社会学
社会心理学
日本語教育
国語教育
⋮

朝日・松田(2008)

敬語研究の着眼点

- ▶ 敬語研究の・・・

- (1) 文法的側面

- (2) 社会心理学的側面

- (3) 社会言語学的側面

について

- ▶ 敬語の**共時態の記述**に主眼が置かれる

- ▶ そのためのアプローチの開発がなされる

例：ポライトネス理論

「注釈」、「わきまえ方式」

敬語の通時態を捉える視点

- ▶ もちろんの存在する！
 - ・文献に基づく敬語変化研究
 - ・「敬語史」研究の蓄積
 - ・「見かけ上」の変化（年齢差）



「仮想上の変化」

岡崎調査では

- ▶ 複数の年齢層を対象にした調査
 - ⇒ 見かけ上の変化が得られる
 - ⇒ 「**仮想上の変化**」の把握
- ▶ 一定の年数(55年)をかけて調査をする,
 - ⇒ 「**実際に起こった変化**」を対象に。
 - ⇒ 変化の方向性を得る
- ▶ 語用論レベルの変化を扱う
 - ⇒ 変化の多方向性 (共通語化とは異なる)

2. 国立国語研究所の岡崎調査

- ▶ 1953年, 1972年, 2008年に愛知県岡崎市で調査
 - 内容: 敬語と敬語に対する意識
- ▶ 平成18年度から国立国語研究所の研究事業に
- ▶ 科研費の交付(平成19年度～平成21年度)
基盤研究(A)「敬語と敬語意識の半世紀
—愛知県岡崎市における第三次調査—」
課題番号:19202014
研究代表者:杉戸清樹



岡崎調査の特色

- ▶ 社会調査型の調査である
 - 代表性を有するデータを収集
 - 統計的手法を用い、インフォーマントを選出
 - 岡崎調査では、400サンプルを得ることを目標に。



	1953年調査	1972年調査	2008年調査
回答者数	434	400	306

3. 「見かけ上の変化」「実時間変化」

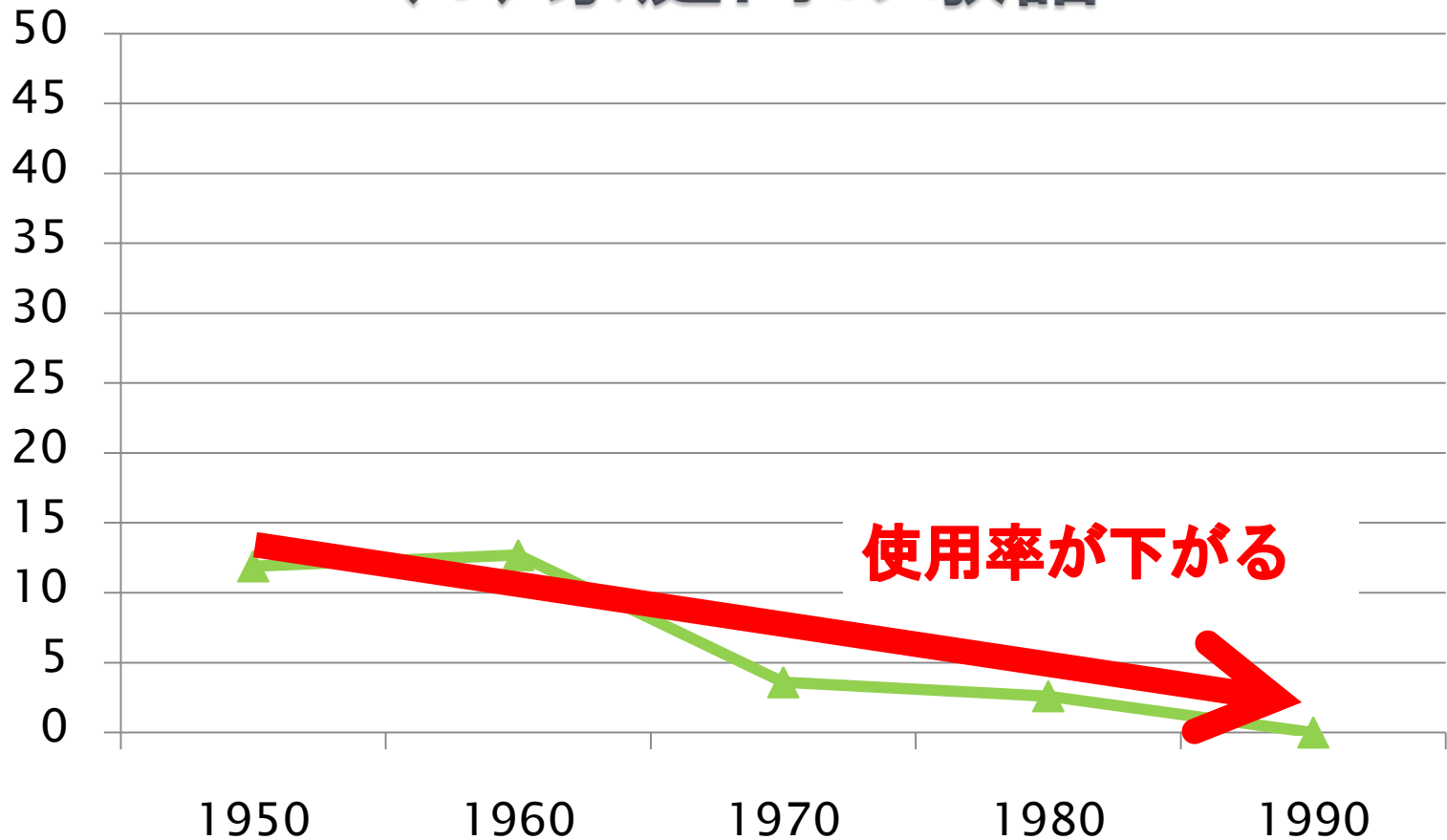
- ▶ 敬語意識に関する項目(2項目)を取り上げる
 - (1) 「見かけ上の変化」(2008年調査)
 - (2) 「実時間変化」(3回の調査結果)
- ▶ 着眼点としては・・・
 - (1) 変化の度合い(変化しているかどうか)
 - (2) 変化の方向性(どこに向かうのか)

(1) 家庭内での敬語使用の必要性

【207】 家の中でも、年長の人や目上の人には敬語を使わなければならないでしょうか。それとも家の中では使わなくてもいいでしょうか。

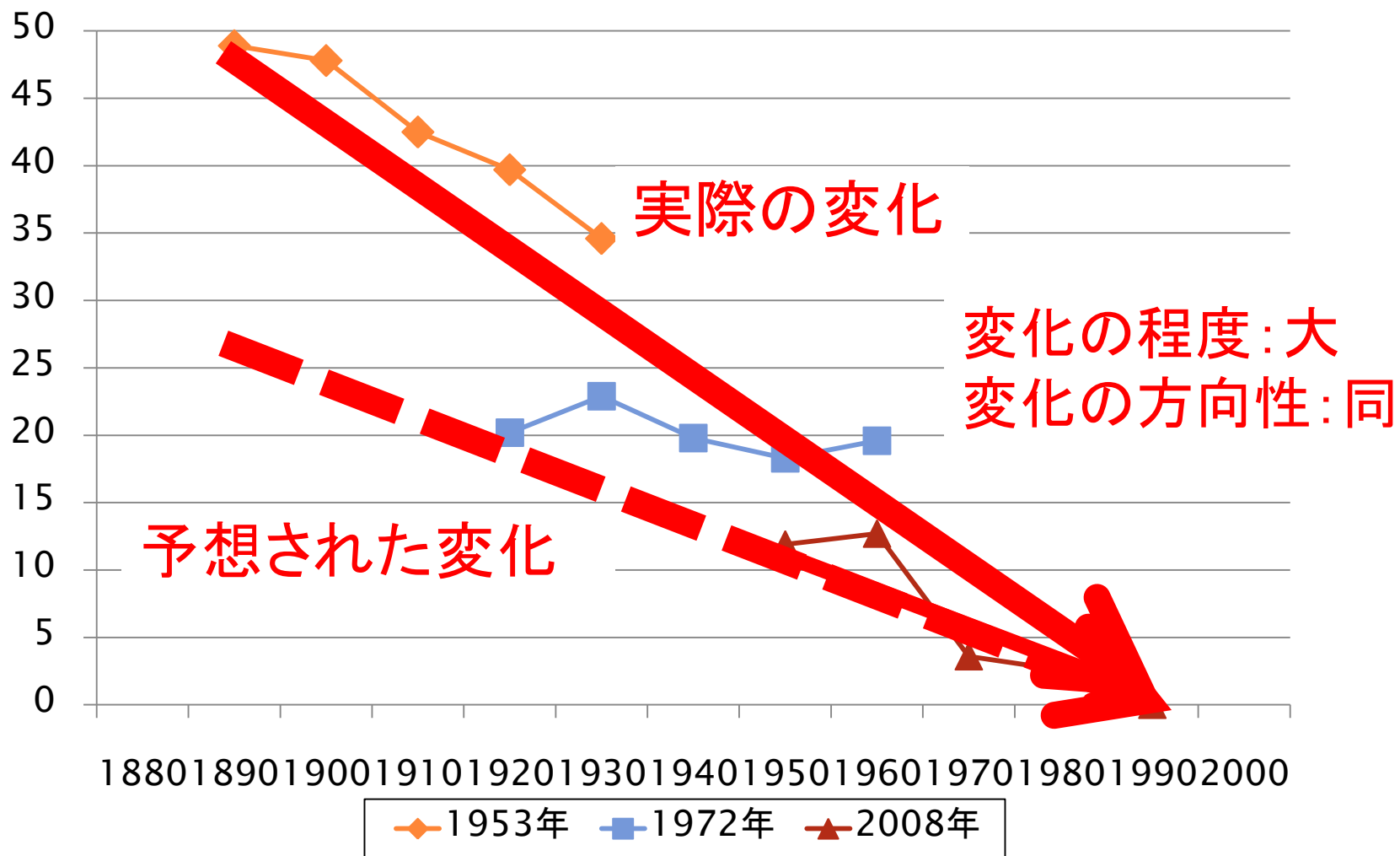
1. 使うべきだ
2. 時や場合や相手による
3. 使わなくてもいい

2008年調査結果 (1) 家庭内の敬語



この変化は「いつ」「どのように」
起こった？

三回の調査結果を見る(家庭内の敬語)



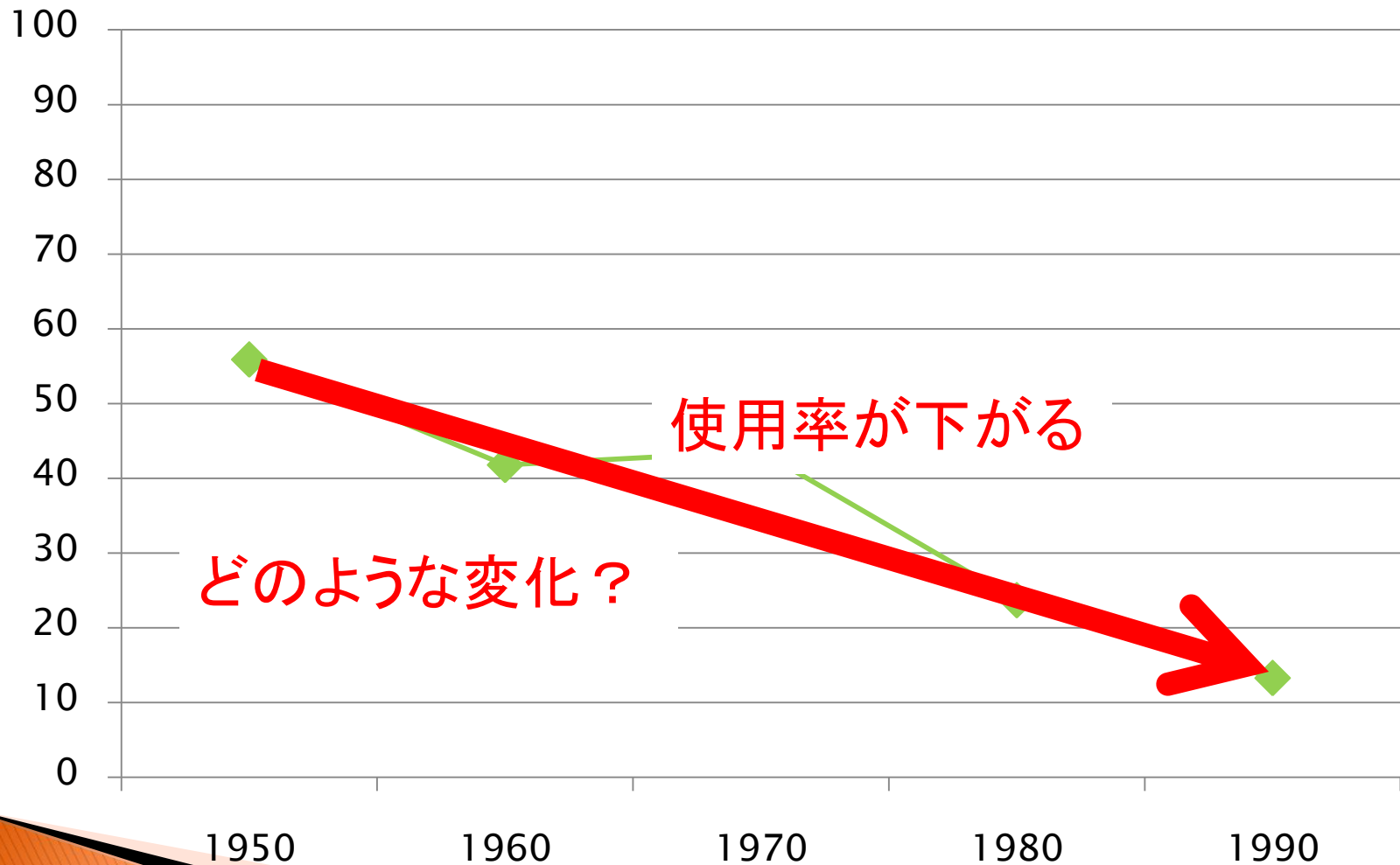
(2) 接頭辞「お」の使用意識

【206】首都圏の方では、何にでもオをつけるようです。たとえば、人参のことをオ人参，眼鏡のことをオ眼鏡と言っています。岡崎でもこのようにオをつけるほうがいいのでしょうか。それともこのようにオをつけるのはよくないのでしょうか。

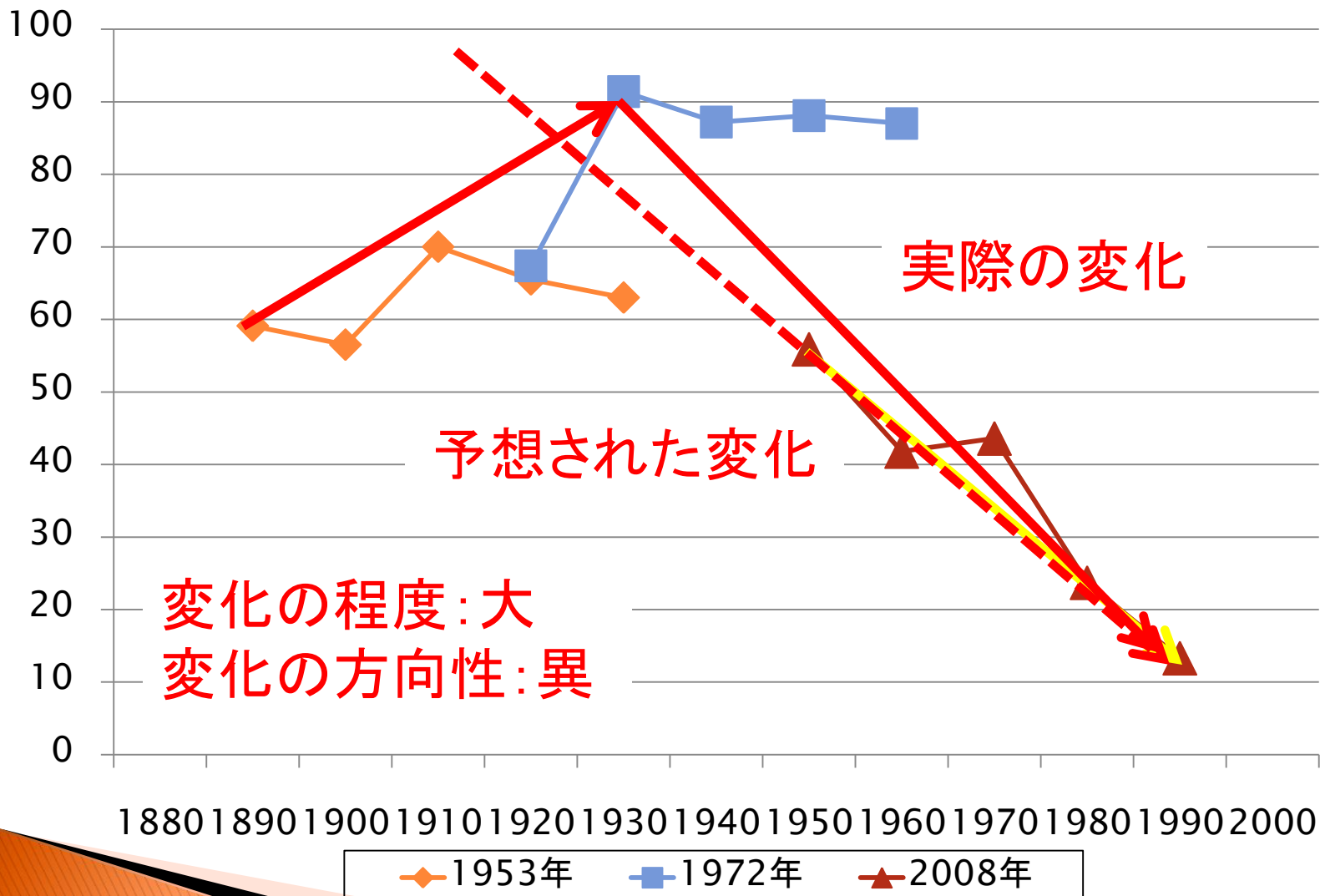
1. つけたほうがいい
2. ものによる
3. つけないほうがいい
4. どちらでもいい

2008年調査結果(2)

接頭辞「お」の使用意識



三回の調査結果を見る(接頭辞「お」)



4. 加齢による敬語意識の変化

- ▶ パネルサンプルデータを用いた分析
 - ・1953年調査からのインフォーマント(19名)
 - ・55年間の間で見られる加齢に伴う敬語意識の変化
- ▶ 分析の着眼点
 - ・ランダムデータと同一調査項目を取り上げる
 - ・変化の方向性との関係を見る
 - (1) 家庭内の敬語使用の必要性
 - (2) 接頭辞「お」の使用意識

分析の方法として

- ▶ 同一話者による三回の調査で回答された選択肢のパターンを分析
- ▶ 具体的には...
 - (1) 家庭内の敬語使用の必要性
 - ⇒「敬語を使うべきだ」と思うかどうか
 - (2) 接頭辞「お」の使用意識
 - ⇒「つけないほうがいい」と思うかどうか

データの集計方法

- ▶ パターンの見方として

- (1) 「敬語を使うべきだ」「つけないほうがいい」・・・0

- (2) それ以外の選択肢・・・1

をコードを付す。

- ▶ 回答のパターンとしては次のように表現されるはず

- 例 000 (3回の調査とも「敬語を使うべきだ」

- 「つけないほうがいい」と回答)

- 101 (2回目の調査で「敬語を使うべきだ」

- 「つけないほうがいい」と回答)

パターン分析結果(1) 家庭内敬語意識

- ▶ 組み合わせが可能な組み合わせは8通り

000 010 001 100

011 101 111 110

- ▶ ランダムサンプルとの関係で考えれば...

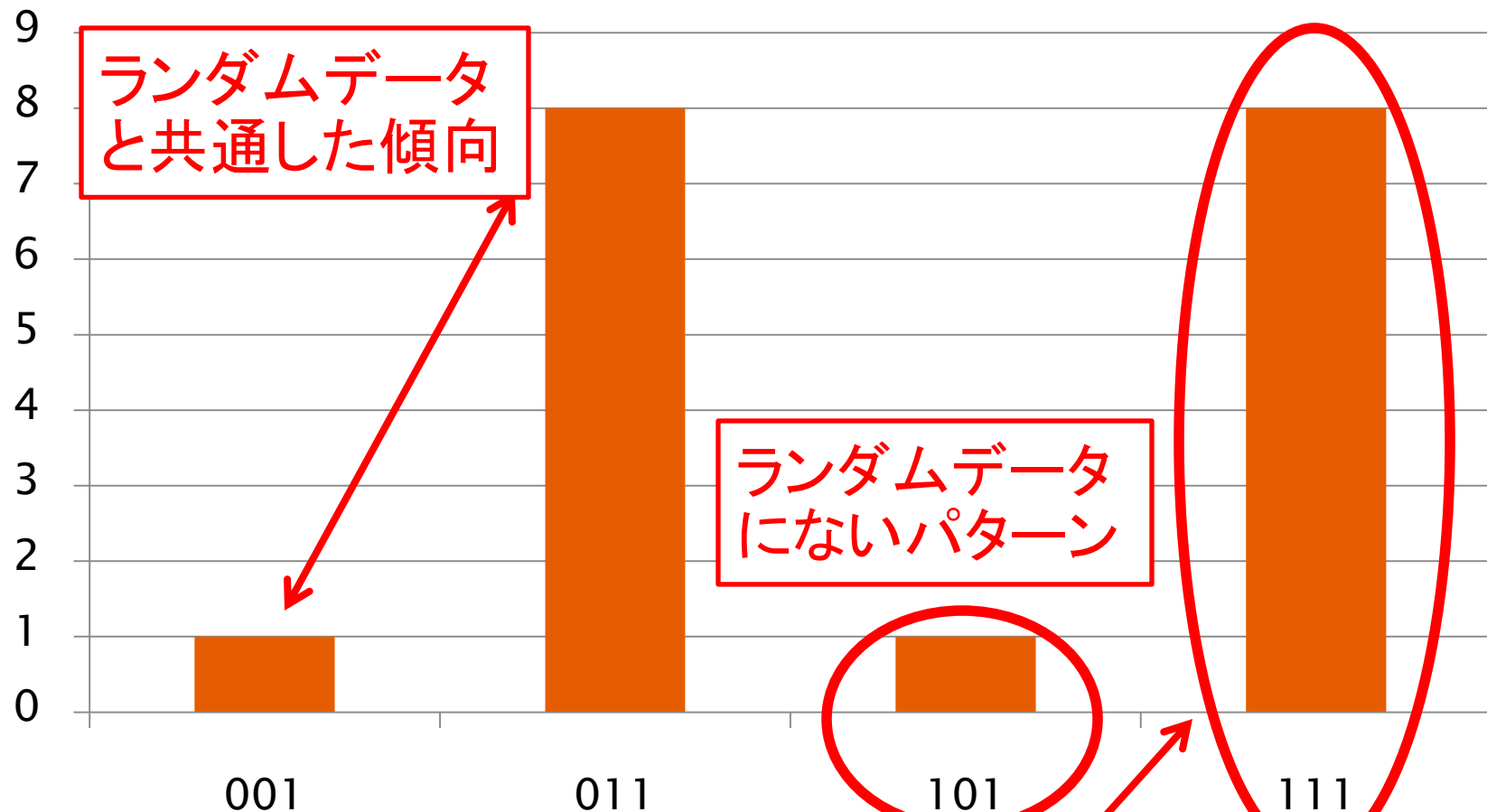
⇒どの時点で「敬語を使うべきだ」と考えなくなるのか

⇒「どの時点」で「1」となるか

- ▶ 見るべき組み合わせは

⇒ 001 011 111 の 三通り

パターン分析結果(1)



ランダムデータ
と共通した傾向

ランダムデータ
にないパターン

そもそも「使うべきだ」と
考えていないグループ

パターン分析結果(2) 接頭辞「お」の使用意識

- ▶ 組み合わせが可能な組み合わせのは8通り

000 010 001 100

011 101 111 110

- ▶ ランダムサンプルとの関係で考えれば...

⇒ 101となるかどうか

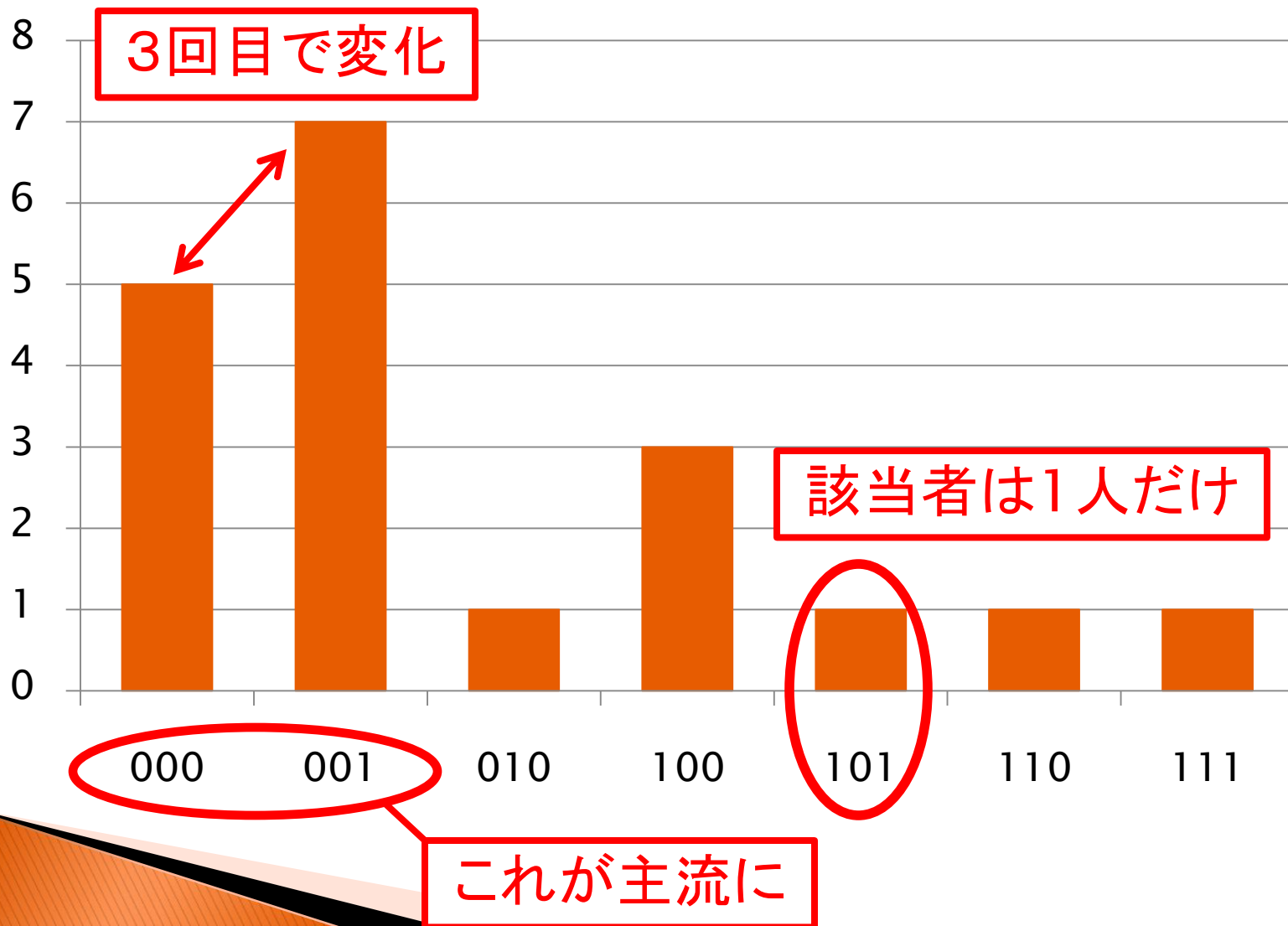
⇒ 2回目だけが「0」となるか

- ▶ となれば

⇒ 101がどれだけを見る

⇒ 他のもどうよう

パターン分析結果(2)



5. まとめと今後の課題

- ▶ 国立国語研究所の岡崎調査を事例に・・・
- ▶ 敬語という語用論レベルにおける言語変化
 - (1) ランダムサンプルを用い,
 - (1-1) 「見かけ上の変化」
 - (1-2) 「実時間的変化」を
 - (2) 敬語意識に関する項目(2項目)についてみた。
- ▶ その結果
 - (1) 見かけ上の変化が実時間的変化を過小評価
 - (2) 変化の方向性が多様であること

まとめ(続き)

- ▶ 加齢変化について
 - (1) 3回の調査に参加したパネルデータ
 - (2) ランダムサンプルデータの分析項目と同じ項目
- ▶ その結果
 - (1) 変化の仕方＝パターンが抽出できる
 - (2) そのパターンは項目によって実時間的な変化の方向性と合う場合と合わない場合がある

今後の課題

- ▶ 他の調査項目との関係
 - (1) 実際の敬語使用との関係
 - ⇒ 岡崎調査のメインデータ
 - (2) 敬語の知識に関する項目
 - ⇒ 家庭内での敬語使用
 - ⇒ 接頭辞「お」との関係
 - (3) 言語生活項目との関係
 - ⇒ 交友範囲・言語生活圏の広狭など

おわり